

影の時を統べる、救世 の王

K氏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——『己の身を犠牲にして、人類を死の運命から救う』。そういった点では、彼は紛れもなく、『救世主』だった。

数多の人々との絆により、何者も到達する事の無かった『宇宙』に……『命のこたえ』に辿り着いた。

しかして、少年の偉業は、ほんの一握りの人間にしか知られる事がなく。

一度世界を救っても、再び時は巻き戻り、同じ時をやり直し、また人知れず世界を救う『作業』に戻る。

——だから、男から『時を統べる王の力』を渡された時、少年は決心した。

「今度こそ、俺は俺のやりたい事をやる」

「俺は、幸せになる」

「そして——今度こそ、彼女を一人にしない。ずっと傍にいる」

——これは、人が救世主になる、愛と勇気の物語ではない。救世主が人に成り下がる、愛と欲望の物語である。

目次

リバイブ／愚者の刻

1

リバイブ／愚者の刻

——はたして、何度この光景を見て来ただろうか。

眼前には惨状。トラックは横転、炎上。一般的な乗用車は言わずもがな。乗っている人々に関しても、何も言うまい。口にする事すら憚られる。

橋を構成するアスファルトは無残にも砕け散り、何かしらの金属の破片が飛び散り、明らかに事故のそれではつかないであろう、銃弾の痕が残っている。一人の少年が体験しているものでは決してなく、しかしこの世界のどこかで必ず起きている、そんな惨たらしい事故現場。

——否、それが単なる事故ではない事は、彼自身がよく知っている。

∨……ああ。またか。またなのか。

少年は、虚ろな目を彷徨わせ、そこにいるはずの『少女』の姿を求める。既に死んでいるであろう父でもなく、まだ少しだけ息がある母でもなく。彼はただ一人の少女の姿を求めた。

既に彼の感覚は、麻痺しきっていた。何何度時間度が巻巻き戻戻つても救直えない両親もの事は、もう仕方がないと諦めてしまっていた。そんな調子でも世界が救えてしまうのだから、少年は自らのそんな醜い部分を、とりあえず脇に置いておく。

……世界を救った？ 本当に？

いつだって、そんな疑念が頭をよぎるが。

そんな疑念を頭から無理矢理おいやり、視線を巡らせ——

「おや、ここにいらっしゃいましたか」

——何故か、見覚えのない男が目に入った。

「——ゆ——」

「おっと。喋るのはよした方が賢明でしょうな。今の貴方は力を持たぬただの幼子。その様子では、喉をいたずらに痛めるだけでしよう」

全身群青色という異彩さで際立つその格好は——幾分か改造されているようだが——所謂司書と呼ぶに相応しい、洗練されたものと言つていいだろう。そして何より目を引くのは、男が手にした、男の格好と同様の色合いの、やけにぶ厚い本。

このナリで普通の図書館にいたならば——その整った容姿も相まって——瞬く間に有名人になる事だろう。

「さて。ようやくこうしてお会いできたのです。まずは簡潔ながら自己紹介をば。私の名はウオズ。ご覧の通りの……語り部でございます」

▽……語り部？

少年は頭にクエスチョンマークを浮かべるが、その疑問が喉から出る事はない。

「では、早速本題に。……貴方が何を為したいのか、それをお聞きしたい」

そう問われ、一瞬、心臓がドクリと脈打った。

「ああ。口を開く必要はありません。私、わたくしこう見えても読心術が使えます」

▽それは聞いてない。

「そうですか……得意技の一つなのですが……まあ、いいでしょう」

何故だか妙に悲しそうな仕草をするのが、なんとというか、鼻につく。

兎にも角にも、少年が為すべきと思つた事を、頭に思い描く。

「……はあ」

「何故か溜息を吐かれてしまった……。」

「……いえ。どうも、言い方が悪かったようで。ならば、こう言い換えましょう」

——貴方の望みを仰りなさい。

『望み』。そう言われた少年は——思わず目を見開く。

「……何を知っている。」

「この本に書かれている事であれば、全て、余すところなく、といったところでしょいか」

そうして、群青の司書は得意げにその本……『Universe Akashic

Records』と題された本を掲げる。

「この本によれば、貴方は実に47回にも及ぶループを経験している……間違いありま

せんね?」

「……今更数えきれるか。」

「おっと。それもそうですね。これは失礼をば」

そう言いながら、ウオズはわざとらしく、仰々しく頭を下げる。

「オホン。さて、貴方はそのループの中で、幾度となく世界を救われた。それも間違いあ

りませんか?」

「……ああ。」

自分で言うのもなんではあるが、しかし事実だ。少年は、何度も世界を救った。己の

身を犠牲にして。

究極の自己犠牲。人身供物。それを、少年は、他ならぬ自分の身でそれを繰り返した。続けた。

「それだけ確認できれば。……なるほど」

「世界を救った者とは思えない程に、貴方は人間臭い」

▽……何を、言っている。

少年は眉をひそめた。

「いえ。ただ……この本には、貴方の為してきた事が網羅されている。この意味がお分りでしょうか？」

「そこまで言われて、少年はようやく、先程のウオズの言葉の意味に気づいた。

▽……待て。二股は不可抗力だ。

「二股どころではなかったとありますが」

「思わず耳を塞ぎたくなかったが、重傷を負った今の体を、そんな事の為に動かすのが億

劫で仕方がない。

「まあ、そんな事は些末事に過ぎません。重要なのは、貴方が人並みの願い、望みを持っている事。それに尽きます」

心臓がまた、ドクリと脈打つ。

「そして、その望みを叶える手段を、私は貴方に与える事が出来る。

……ただ一つ、契約を結びさえすれば」

また、ドクリと脈打つ。

「さすれば、貴方は己の幸せを勝ち取る事が出来る……いえ、こう言いましょうか。」

——永劫に先に進む事のない彼女との時を、進められる。

契約。その言葉の重みは、良く知っている。ある意味で、彼は契約によつて運命を縛られているのだから。

だから——その内容が、とても甘美なものに思えて。

✓……分かった。結ぼう、その契約。

一瞬の間を置いて、彼は迷いなく、その提案に乗った。

本来ならば、未来で結ばれるはずだった契約を蹴り、新たな契約を選んだ。

「貴方なら、乗って下さると思っていましたよ」

群青の司書の口元が弧を描いた。

これはきつと、悪魔との契約のようなものだろう。そういう契約は、タチが悪いと相場が決まっている。

だが、元より少年は、死神と契約していたようなもの。なら、今更悪魔と契約したところで、大して違いはないだろう。

成熟した——あるいは摩耗しきった——少年の精神は、いとも簡単に、あっさりと、その忌避感を乗り越えてしまった。

「では——これを」

そうして、ウオズがどこからともなく取り出したのは、黒い何か。

近くで見ると、それは丁度、今の少年の握り拳ぐらいはある、懐中時計のようなものだった。

「使い方は……まあ、貴方ならすぐ分かるでしょう」

～……初対面の筈なんだが。

何故か妙に信頼されているというか、ある程度の信用を得ているらしい。

が、この男に何故を問うたところで、どうせはぐらかされるだろうと、少年はこれまでの経験からそれを察していた。

事実、この胡散臭い司書は、ただニコニコと仮面のような笑みを浮かべるだけ。だから——とりあえず、少年は心の赴くままに、その懐中時計めいた何かを手にとった。

そして、それをよく見ようと自分の方に向けると同時に、光の針が時計の表面をグルリと回った。まるで、少年が手に取った事で歯車が動き出し、時を刻みだしたかのよう。

光が一周すると、懐中時計が眩い光を放ち——黒いボディはそのままに、表面に何かを描かれた。

察するに、何かの顔だろうか。

横向きになったその眉間には『カメン』という文字が。

その下には、『2009』という数字が刻印されている。

それは、少年にとってあまりにも縁の深い数字。

∨……こいつは。

「貴方の知る仮面の力と、似て非なるもの。

貴方のそれが集合的無意識……心の海から出ずるものなら、

これなるは長き歴史から出でしものにして、仮面の戦士に纏わる歴史そのもの」

そして！ と、ウオズは語気を強くする。

「——そのウォッチこそは、時を統べる王者、『ジオウ』の歴史を内包するもの！」

彼の者に支配できぬ時は存在しない！……ですが、問題がありましてね」

唐突に落ち着いた様子に戻り、テンションの違いに少年は少しばかり調子を狂わされてしまう。

だが、その後に告げられた『問題』の内容を聞き——少年は納得する。

～……大体わかった。

「おや。察しがよろしい。流石は——」

～御託はいい。それで？ 契約書はいらないのか？

「いえ。そのようなものは必要ありません。

貴方はただ、そのウォッチを起動するだけでいい」

そう促されるままに、少年は懐中時計……『ライドウォッチ』の上部にあるスイッチ、ライドオンスターターを押す。

『ZII—O—！』

渋い男の声がウォッチから発せられ——瞬間、ウォッチから溢れ出した『影』が、少年を包み込んだ。

——普通の高校生、『常盤ソウゴ』。彼には魔王にして時の王者、『オーマジオウ』となる未来が待っていた。

——……が、これより語られるは、彼の御方の王道が語られる物語ではございません。

——言うなれば、これはそう、外伝。『影』の物語。

——とは言え、全てにおいて関係のない話ではありません。これは紛れもなく、『オーマジオウ』が抱える歴史の一部。

——さあ、さあ、ご覧あれ！ これより始まるのは、一人の救世主が、唯の人へと成り下がる、悲劇にして喜劇の物語！

——影の王となりし救世主の未来に待つもの、それは……おっと。これから先は、未来の出来事でした。